

随想

民芸品の宝庫を尋ねて

会員 市野瀬 仁

福岡県のある大学で定年退職されて後、尚講師をされて
いる方が佐伯にいらつしやる。

三年程前、私達「佐伯史談会」員十名がくわの者、
先生のコレブシヨンの見学がたがたお話を伺つたことが
あつた。

その時の強い印象が忘れられないので、先達て郷土誌
クラブの生徒七名をつれて、私は再び訪問した。

先生の家は最近建てられたので、広い庭の樹々もわり
に小さく、高い塀もなく、小鳥達が自然に集まつてきそ
うな、涼しい空気が我が家である。

玄関に入ると、赤や青や原色に染まった沢山の民芸品
に囲まれて、しばらく挨拶の言葉も忘れるほどである。

西政のもの、アジア各地のもの、アフリカから南洋の
島々のもの、北海道から沖縄に至るまで、人や動物や具
象化されたものがあふれるばかり、今にも棚の中から躍
り出らんばかりに迫ってくる。

廊下の程よい高さにある紐を引くと、「ジャラン」と
錫の音が響く。スイスイのものという。居間の鴨居には、
朱色の女の面が笑っている。その細い目の笑いと、何ん
とも云えぬ朱の色が、いつまでも体の中で温まり離れな
いかである。

生徒七名と共に先生の仕事部屋に通された。そこには
珍らしい全員の服が四方に掛けられていた。机の上には
伝統のある人形と、商品として作られた今日やりの人形が
並べられていた。

先生は確かな言葉で、民芸品の地域性と創造性を、良
いモノの手間と素材さと温かさを生徒に語りかけた。
芸術品には説明は不要と思つていた私も、本物と贋物
の在りかき取の巧みさに見せつけられて、両者の価値の
識に言葉の重要さを知つた。

佐伯の地に、こんな香り高い民芸品の宝庫があること
を知つた生徒達は、卒業までわによい想出を持つたと思
うと、私もうれしかつた。

また、彼女達が母親ともなつた時、子供達をつれて氣
軽に見られる、縁の民芸館が、立万都市佐伯に一つはあ
つてほしいと思つた。

玄関で記念写真を撮つてお別れをした。

(おわり)

考 岳 二 首

冬去りて春また来れば 考岳は山ふとこゝろに
桜咲くなり 白井市 松 並 正 作

考岳の香に立てば阿蘇・久住・祖母みま山鏡
きなり雲低うして 故 御手洗 榊

(古二首は白井合同短歌会第十年間歌集「考岳」より)